

修士論文(要旨)

2016年1月

テレビ報道番組におけるゲストとキャスターのインターアクション分析

指導 宮副 ウォン 裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3017

堀口 典子

Master's Thesis (Abstract)

January 2016

An Interaction Analysis of Guest and Newscaster in a Television News Program

Noriko Horiguchi

213J3017

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

## 目次

<b>第1章</b>	<b>はじめに</b>	1
1.1	研究背景	2
1.2	先行研究	3
1.3	用語の定義	4
1.4	研究目的	5
<b>第2章</b>	<b>番組のインターアクション分析</b>	6
2.1	番組の概要	7
2.2	番組の構成	7
2.3	分析の枠組みと方法	9
2.4	番組の分析 まとめと考察	16
<b>第3章</b>	<b>受け手の調査</b>	18
3.1	質問紙調査の概要	18
3.2	質問紙調査 まとめと考察	20
3.3	インタビュー調査の概要	20
3.4	分析の枠組みと方法	20
3.5	オーディエンスを取り巻く環境	22
3.6	インタビュー調査のまとめと考察	28
3.7	受け手の調査 まとめと考察	30
<b>第4章</b>	<b>伝え手の調査</b>	33
4.1	調査の概要	33
4.2	分析の枠組みと方法	34
4.3	プロフェッショナルが集結する現場（生産現場の仕組み）	34
4.4	伝え手の調査 まとめと考察	40
<b>第5章</b>	<b>総合的考察</b>	45
5.1	受け手と番組	45
5.2	番組と伝え手	47
5.3	受け手と伝え手	50
<b>第6章</b>	<b>まとめと今後の課題</b>	53
6.1	わかりやすく伝えるとは	53
6.2	学び合い	54
6.3	今後の課題	54
	<b>参考文献</b>	a
	<b>巻末資料</b>	I

近年、日本語母語話者（以下、母語話者）自身が「日本語」を学び直すことに関心が高まっている。義永(2013)では、日本語の多様性に触れ、その価値を認めることが日本における複言語・複文化主義の端緒となる可能性を示している。稿者は、10年間放送局に勤務し、テレビとラジオを通して、「日本語」で情報を伝えてきた。そこで、どうすれば情報が受け手に「わかりやすく伝わる」のか試行錯誤した。それは、まさに「日本語」を学び直すことだった。本研究では、NHKで放送されているテレビ報道番組「クローズアップ現代」で行われるゲストとキャスター（母語話者同士）のインタラクティブに着目し、彼らの伝え方を検討する。テレビ番組の分析の先行研究は多岐にわたっており、特に出演者のインタラクティブに注目した研究として、本田(2004)、高橋(2005)、村松(2005)、石山・川上(2007)などが挙げられる。しかし、現在のところ、番組の分析、受け手の解釈、伝え手の方策などが別々に研究され、平面的な見方の提示にとどまっている。より総合的な把握には、受け手や伝え手の側からも番組内のインタラクティブについて分析・考察を行い、より多角的に読み解くことが望まれる。そこで本研究では、1)番組の分析、2)質問紙とインタビュー調査による受け手の評価、3)伝え手のインタビューからなる3種の複合的なデータを分析し、これまで当然と考えられてきたメディアを取り巻く「日常を問い直す」(岡井 2009:5)ことで、受け手と伝え手をつなぐ「日本語で伝える」ことについて考察を深めることを目的とする。

番組におけるゲストとキャスターのやりとりは、高橋(2005)の分析枠組みを援用した。その結果、キャスターとゲストのインタラクティブは、先行研究で示されている制度的会話にのっとったものであった。発話に注目すると、ゲストとキャスターによって、キーワードをくり返したり、両者はそれぞれの立場を「中立」に保つために様々な「わたし」を出現させたりしていた。

受け手と伝え手のインタビュー調査は、鈴木(2001:104)のメディア分析モデルを援用した。受け手の質問紙とインタビュー調査は、日本人の大学3年生を対象に実施した。全員が母語話者だが、就職活動を控え、新たな場面に適した「日本語」の獲得を始める時期だと考え、番組におけるキャスターの言語行動をクリティカルに評価してくれることを期待したからである。キャスターの役割に着目すると、受け手に情報をわかりやすく伝えることが「いい伝え手」の条件であることが示された。その要因は、「話し方の技術」と「キャスターとしての役割遂行」の2つが挙げられた。一方でメディアの読み取り能力が不十分であることが散見された。彼らが批判的な視座に立ってメディアと関わるができるようになるためには、メディア・リテラシー教育の必要性も浮き彫りになった。

伝え手の調査には、放送局に所属する現役のアナウンサー2名（女性・男性）に協力を得ることができた。キャスターは番組の生産・制作側の代表であると同時に、受け手側の代表として振る舞っていることがわかった。すなわち、伝え手としてのキャスターは、番組制作側と受け手側からの要求に応えなくてはならず、自分の意見を主張するのではなく、決められた内容を正しく伝えたり、決められたゲストの答えを導き出すために質問をしたりする役割を担うにすぎないのである。逆の見方をすれば、ゲストの話す内容を知っているからこそ、それに間違いや漏れがないかなど客観的にモニターし、修正したり、言い換えたり、場合によっては質問をし直したりできることが明らかになった。

以上3者の分析から、「わかりやすく伝える」とは、「キーワードをくり返す」、「しっかり話を聞く」、「共感する」という3つの要素によって、キャスターがゲストや受け手と同じ時

間や情報を共有する「場」を作り上げていく結果として現れるものであった。その中で、テレビ番組の制作者も伝え手も受け手からの指摘によって、番組の演出を工夫したり、伝え方や振る舞いを修正したりしていた。また、受け手は、伝え手のプロフェッショナルの情報発信の技術を見聞きすることで、いろいろな場面に応じた適切な話し方や自身の言語観への気づきがあった。今回調査した番組(制作者)と受け手と伝え手の3者は互いに理解し合おうとするプロセスの中で「学び合っている」ことが明らかになった。それは、それぞれの立場から「日本語」を再考し、豊かな表現を追求する姿だと捉えることができるだろう。

本稿では母語話者同士のインターアクションを母語話者が評価する調査を行ったが、実際に番組を視聴しているのは、年齢、職業、国籍、母語など多様な背景を持っている人たちである。「わかりやすさ」という視点で捉えると、母語話者と非母語話者、若年層と成年層では異なるだろう。そのためにも、調査目的の妥当性を確保できるよう、調査協力者の選定や手法についてもさらに検討することを今後の課題としたい。

## 参考文献

- 石山玲子・川上善郎(2007)「主観的現実をつくるメディアトーカーワイドショーのトークタイプと発言機能」『コミュニケーション紀要』19, 1-38
- 岡井崇之(2009)「メディアを分析するということ」藤田真文・岡井崇之(編)『プロセスが見えるメディア分析入門—コンテンツから日常を問い直す』世界思想社, 1-10
- 片岡邦好・池田佳子(2013)「「コミュニケーション能力」再訪」片岡邦好・池田佳子(編)『コミュニケーション能力の諸相 変移・共創・身体化』ひつじ書房, 1-28
- 下村健一(2010)『マスコミは何を伝えないか—メディア社会の賢い生き方』岩波書店
- 杉山ますよ(1998)「進行役とゲストの発話にみられる繰り返し」『言語文化と日本語教育』16, 46-57
- 鈴木みどり(2001)「ジャーナリズムとメディア・リテラシー」鈴木みどり(編)『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社, 100-117
- 高橋圭子(2005)「『クローズアップ現代』の〈物語〉メディア・テキストの批判的分析」三宅和子・岡本能理子・佐藤彰(編)『メディアとことば2—組み込まれるオーディエンス』ひつじ書房, 62-97
- 中田智子(1992)「会話における方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告』13, 267-302
- 永瀬治郎(1999)「スポーツ中継アナウンサーと解説者の評価について」『専修国文』65, 1-16
- 中橋雄(2014)『メディア・リテラシー論—ソーシャルメディア時代のメディア教育』北樹出版
- 本田厚子(2004)「テレビ討論における司会者の役割」三宅和子・岡本能理子・佐藤彰(編)『メディアとことば1—「マス」メディアのディスコース』ひつじ書房, 66-91
- 三宅和子(2004)「スポーツ実況放送のフレーム」三宅和子・岡本能理子・佐藤彰(編)『メディアとことば1—「マス」メディアのディスコース』ひつじ書房, 94-126
- 村松賢一(2005)「ニュース番組における「おしゃべり」」三宅和子・岡本能理子・佐藤彰(編)『メディアとことば2—組み込まれるオーディエンス』ひつじ書房, 2-29
- 義永未央子(2013)「日本人・日本語母語話者による日本語の学び直し—日本社会における複言語・複文化主義の可能性—」『2013年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』314-319

## 参考 URL

(2015年12月20日 最終検索)

NHK クローズアップ現代 <http://www.nhk.or.jp/gendai/>